

物情騷然の巻

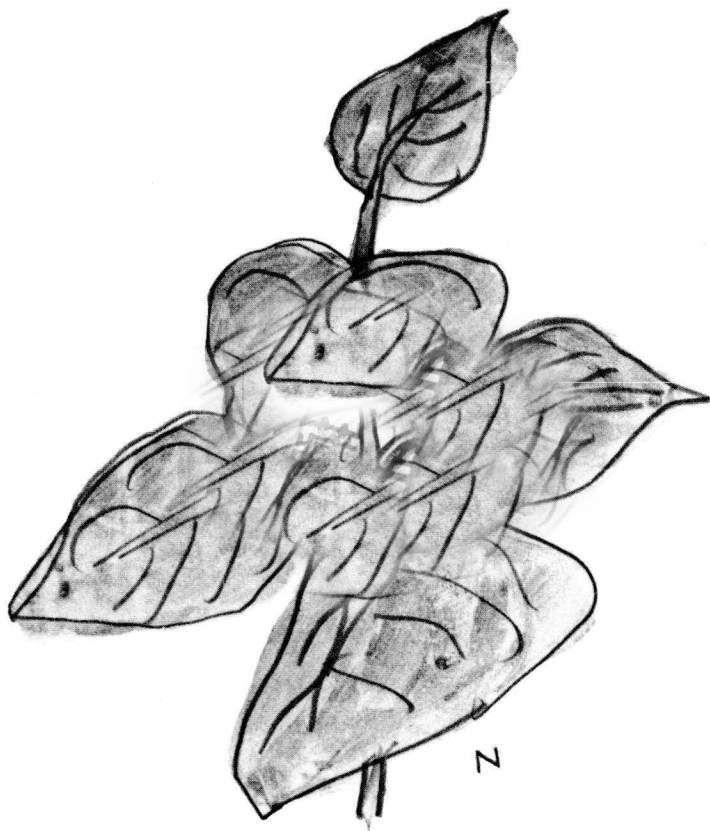
回想の文学②
昭和九年—十一年

中島健蔵



物情騷然の巻

回想の文学② 昭和九年一十一年



中島健蔵

平凡社

中島健蔵(なかじまけんぞう)

1903年東京に生まれる。1928年東京帝国大学文学部仏文科卒業。同研究室副手を経て1934年講師となり、1962年にいたる。1933年ごろから評論の執筆をはじめ、「作品」、「文学界」の同人となる。戦後、文芸家協会、ペンクラブ等の再建に協力、各種の団体を創立、役員として働く。現在日本中国文化交流協会理事長のほか役員多数。

『昭和時代』(岩波新書)『自画像』1～5(未完・筑摩書房)『音楽とわたくし』(講談社)『後衛の思想』(朝日選書)ほか多くの著書がある。

物情騒然の巻 回想の文学②

昭和五十二年六月三十日 初版第一刷発行

昭和九年十一月

著者——中島健蔵

発行者——下中邦彦

発行所——株式会社平凡社

東京都千代田区四番町四番地一

郵便番号一〇二 振替・東京八二九六三九

電話〇三二六五〇四五(大代表)

印刷——図書印刷株式会社

製本——株式会社石津製本所

© 中島健蔵 1977 Printed in Japan

不良本お取替えは直接小社サービス課まで
(送料小社負担)

物情騷然の巻

目次

一 模索時代 7

東大仏文科の講義——法政大学・帝国美術学
校——美術家との交遊——文学者のたまり場

二 危機感 27

「文学界」の沿革——不安の文学——屏風の
品評——横光利一の講演

三 暗い風景 48

外庄と内面——長谷川春草の死——橋の上の
醉漢——『懷疑と象徴』

四 意識と行動 66

『半作家の運命』——『停滯時の豊饒』——
能動精神の文学——母の詩

五

カラミ酒

84

横光利一の話——「学芸自由同盟」——私立
病院の経験——体当りのカラミ酒

六

眠りがたい夜ごと

103

文学の友——太宰治の来訪——井伏鱒二と豊
島与志雄——宮澤賢治の衝撃

七

芸術家と世間

124

平野謙の告白——旧左翼と新左傾——結婚
——「作品」五周年

八

善意の哲学

144

意識の場——クリテリウム——川端康成を見
舞う——小説と現在感

九 湖畔の夏

168

さまざまな人生——文学批評とは？——林

芙美子の遊び——日本主義

一〇

『デカダンスに就いて』

191

豊島与志雄の危機——ニヒリズムと世俗的常識——太宰治の葉書

一一

わかれ道

209

「鬼の眼」——横光利一の外遊

一二

立ちすくむインテリゲンチヤ

226

二・二六事件——「レインボー・グリル」の

一夜——判決後の諸家の感想

一三 新しき「無」 243

レトリックの世界の無力——牧野信一の死

一四 ニヒルとの闘争 260

豊島与志雄の小説——牧野信一の敗北——

『新しき「無」に就いて』の反響

一五 現代文学の困難 280

ジャン・コクトーの来日——当時の文芸家協

会と「文芸年鑑」の改革——『現代文芸論』

あとがき 300

昭和九年——十一年関係年表 302

索引 319

装幀

口絵

中川一政

一 模索時代

東大仏文科の講義——法政大学・帝国美術学校

——美術家との交遊——文学者のたまり場

毎日、自宅から、金ボタンの制服に角帽をかぶって東大へかよいはしめる前から、本郷は、わたくしにとって、親しい土地であった。中学生のころから、よく東大へ遊びに行つて、あの池のほとりをうろついていた。関東大震災の前で、古めかしい赤煉瓦の建物がならび、大学生といえ、りっぱなおとなと思つていた。その赤煉瓦がくずれ落ちたあとに、黄褐色のタイル張りの新しい建物が建ちはじめたのは、その時の呼び方では、東京帝国大学文学部仏蘭西文学科卒業前後であつた。それから三十七年間、ずっと本郷へかよいつづけたわけである。

小学校、中学校の時は、当時の小石川区大塚窪町の東京高等師範学校（後の教育大学更に筑波大学）の「附属」へかよつていた。中学校卒業後も一年間は、「浪人」のくせに同じ制服制帽で母校の

補習科にかよったのだから、正味十二年間、同じ場所へかよいつづけたことになる。大塚も本郷も、大震災、戦災を経た東京の中では、どこかに戦前のおもかげを残している町である。ことに、両方とも、学校は旧大名の屋敷あとで、廃校あるいは移転後の将来、どうなるかはわからないが、かなり大きな池がある。夏目漱石の小説にちなんで、東大の池は、「三四郎の池」などと呼ばれ、大塚の方は昔のまま占春園心字の池と呼ばれていた。

かよった場所は二カ所だが、自宅の方はその間、五回以上変っている。小学二年生の時、青山南町から、当時の麻布区霞町に引っ越した。そのころ、大塚までかようのは、当時の「市電」——東京市電気局のチンチン電車で何度も乗りかえ、一時間半ぐらいかかったと思う。朝早く、霞町一番地の自宅を出て、青山墓地の端にあった「墓地下」という停留場から電車に乗り、青山一丁目で乗りかえて赤坂見附まで行き、「外壕線」に乗りかえて飯田橋でまた乗りかえ、はじめは、小石川の「伝通院前」までしか電車がなく、そこから大塚窪町まで歩かなければならなかった。そのうち、伝通院前から大塚まで電車が延長されたが、それでも片道一時間はたっぷりかかった。

中学校一年生の時、今度は、当時の東京府荏原郡駒沢村大字上馬引沢——今の上馬に移転した。狭軌の路面電車だった玉川電車で渋谷まで出て、当時の「院線」——鉄道院電車——の山の手線（後に山手線）で大塚まで、大塚から「市電」で大塚窪町まで、そして学校の通用門から構内にはいるという道順が、補習科を含めて六年間つづいた。これも一時間ほどかかったと思う。

上馬は比較的長く、十三年ほどつづいた。三年間、松本高校へ移って、大学を卒業した年に、当時の豊多摩郡角筈池ノ上、後の十二社二六二番地に引っこした。この家は、戦災で焼かれるまで住んだ

が、今度は京王電車かバスで新宿へ出て、「省線」——鉄道省電車——の中央線でお茶の水へ行き、そこから本郷までは、歩いていたと思う。バスができたのはいつごろか、これが、戦災までつづいた。本郷も神田も古書店の町である。わたくしにとっては、神田界限は、本郷の延長のようなものであった。

戦災で焼け出されてから、一時、大曲の江戸川アパートの友だちの室に寄寓、その中でも一回移室、さらに、現在の中野に寝ぐらを求めたのだが、そこでも、現在の家へ落ちつくまで一回移転している。はじめに、五回以上移転したと書いたのは、戦災後、二回ないし三回居を移しているからである。それに引きかえ、本郷の東大へは、三十七年間もかといつづけ、この方は、戦災もまぬかれたのだから、この土地とのつき合いが、一生のうちで一ばん長くなりそうである。中野が一ばん長かったというるためには、八十歳を越さなければならない勘定だ。

本郷で一ばん気楽だったのは、研究室の副手、助手の時期であった。バラックの研究室から、新築の附属図書館内に移り、もう一度、強制的に部屋を変えさせられて苦労したが、行動に自由があり、責任も軽かった。講師になってからは、ますます行動は自由になったが、教壇に立つとなると、大きな心理的負担を感じることになる。吉祥寺の帝国美術学校へ前から講義に行っていたし、東大と同時に、法政大学へも行くことになったが、私学の方は、空気がちがっていた。

昭和十年代の大学の講師は、常勤と非常勤と二つに区別することができた。今でも同じことかもしれないが、当時は、非常勤などということばは使っていなかったと思う。助教授、教授と「昇進」する入口としての講師と、そうでなく、講義の不足を補充し、あるいは特殊な専門的知識を講義すると

いう意味の講師というふうにわけた方がいいかもしれない。前者を専任講師、後者を非常勤講師と呼べば、はっきりする。わたくしの場合は、はじめから後者であった。非常勤の場合は、講義回数に依じて報酬を出すのが原則と思うが、東大の場合は年俸なみで、出講の有無とは無関係に、毎月四十何円かが支給される。それにしても安すぎて、腹いせの気ももちも働き、三カ月ぐらいためて貰うことが多くなった。事務室では迷惑して、毎月取りにきてくれなどといわれたこともあった。

非常勤講師は、大ていかけ持ちである。学生の時、怠けて教育学関係の単位をとらなかったので、わたくしは教員免許証を一つも持っていなかった。東大の講師は、教授会の決議によって委嘱されるわけで、教員免状の有無は問題外である。任期は一年ずつだが、一度その経験をすると、それが信任状のような効果を持って、ほかの大学などの講師にもなれるという仕かけであった。正規の資格としては、小学校の「代用教員」ぐらいしかなかったわけである。東大講師以前の、帝国美術学校は私立で、はじめは「各種学校」ではなかったかと思う。また法政大学のほか、塩田良平の家政学院、後には明治大学文芸科、日本大学文学部など、いずれも縁故があつての委嘱であつた。

非常勤といつても、時間割りがきまつていたので、その時間は拘束される。準備なしの講義は不可能だから、かなりの時間が講義の前に費される。おまけに試験である。大学は学年末一回だが、試験期になると、学生も大へんだらうし、採点しなければならぬ教師の方も楽ではなかった。一九六二年（昭和三十七年）三月限り、一さいの学校の講義をやめてみると、今までとは生活がちがってき、気もちが意外なほどのびのびしたには驚いた。

東大でわたくしが受けたのは、フランス文学演習一単位と、文学部の一般語学のフランス語前

期課程であった。フランス文学の方は、仏文科の学生が大部分だから、それほど人数ではなかった。一九三四年（昭和九年）度の学生名簿を見ると、それでも、七十二人の名が出ている。もちろん、全部が出席することはない。半分出たとしても三十六人、実際はもっと少なく、三十人ぐらいではなかったかと思う。確実に教室で顔を見たことのない学生の筆頭は、一九三〇年（昭和五年）入学の津島修治——太宰治であった。教室に出ていたかどうか覚えがないが、家が近かったのでよく遊びに来たのが、一九三二年（昭和七年）入学の学生委員森有正で、このクラスには小林正もいた。演習に使ったテキストは、おそろしく保守的なもので、ブリュンチエールの『文学史におけるジャンルの進化』であった。正直のところ、わたくしが学生だったとしたら、この講読には出なかったらうと思う。ブリュンチエールは、オーギュスト・コント直系の実証派だが、新しい——といっても十九世紀末の象徴主義や自然主義を否定し、一九〇六年に死んでいる人物だから、辰野隆教授や鈴木信太郎助教授とは相容れないはずの批評家であった。ところが、辰野さん自身が、ウィリエ・ド・リラダンの『トリビュラ・ボノメ』とならべて、ブリュンチエールの『十九世紀フランスにおける抒情詩の進化』を講読しているのだから、へんなものであった。もっとも辰野さんの講読は、「文学」ではなく『語学』の方で、文学の方では、辰野さんは、ブリュンチエールとはまるで反対のような「十九世紀仏蘭西文学思潮」を講義していた。語学と文学との区別はいいかげんなものであるとしても、わたくしの演習は語学ではなく文学であったから、ブリュンチエールは、語学、文学の両方にまたがっていたわけである。

卒業論文にボードレールを選び、ポール・ヴァレリーの『ボードレールの位置』を訳していたわた

くしが、自分でブリュンチエールをテキストに選ぶわけがない。これは病気で休職となった山田珠樹さんの置きみやげだが、三十一歳の若い講師に対しては、苛酷なあまくだりであったというほかない。最初一年間はやむをえず我慢した。演習というのは、まず学生に順ぐりに訳読させ、それをもう一度教師が訳しなおすという形をとる。あらかじめ、次の時間の訳読者をきめる場合もあるが、いきなり名簿で名指してやらせる場合もある。多分最初の年度だったと思うが、わたくしは、学生を教壇にあがらせて、自分は下の席で聞くという形をとったことがある。別に文句は出なかったが、これでは、聴講者はへる一方で、次の年度から、ブリュンチエールは勘弁してもらい、その代り、ヴァレリーの『ヴァリエテ・II』を読むことにした。この時から、学生を教壇にあがらせるようないたずらはやめた。しかし、ヴァレリーのほかに、ブリュノの『アカデミー・フランセーズの文法批判』をおまけにつけた。それは、そのころ公刊されたきわめて保守的なアカデミー・フランセーズの文法を、こてんぱんにやっつけた批判で、一年間ブリュンチエールで苦勞させられた腹いせのようなものであった。この二本建ての講読を、時間的にどう割りふったのか、これは忘れた。講師になった時、将来、「フェリブリージュ」を専門的に研究したら、とも鈴木さんにいわれた。南フランス地方語のプロヴァンス語文学の十九世紀における復活運動である。ミストラルとかオーバネルとかの名は知っていたが、あまくだりは、まっぴらと、これもうやむやにした。

若い教師に対する学生の眼は、意地悪なものである。難解なテキストと格闘しながら、わたくしは、学生時代に自分が先生方のあげ足をとったことを反省しつつけた。ことに、高等学校の時、ドイツ語の授業を怠け放題怠けながら、たまたま、テキストの中にフランス語が出てきて、それが誤植で

あることに気がつかなかった教授をからかったおれの態度はよくなかったな、などと後悔した。ふしぎなことだが、東大のフランス文学科の先生は英語に弱かった。辰野さんも鈴木さんも、中学校では英語をみっちり学ばされたはずである。暁星学校のように、はじめからフランス語一点ばりの学校ならいざ知らず、「府立一中」とか、「附属」とかの英語はきびしかった。それなのに、鈴木さんなど、英語に弱いことを誇っているようにさえみえたのは、ふに落ちなかった。エドガー・アラン・ポウなどの引用があると、辰野さんも時々初歩的な誤訳をした。学生が「あ、あ……」と声を立てると、「ちがったか？ 誤訳か？」と大声を出す辰野さんにはむしろ好意がもてたが、先生いじめをするものではない、というのが、講師になりたてのわたくしの後悔であった。

フランス文学の講読の方はまだよかった。一般語学というのは、外国語の教員無試験検定のための必修講義で、フランス文学科の学生を除き、各学科の学生が集まってくる。英語やドイツ語とちがって、フランス語は、全くはじめてという学生が大部分だから、こちらの好意として、初歩から教えるければならない。前期、後期の二学年で修了だが、わたくしの前の前期担当は、鈴木助教教授だった。どんな教え方をすればいいのか、見当がつかなかったが、鈴木さんに聞いてみると、御本人が英語に弱いはずなのに、文法は大体英語と同じだ、発音はちがうと教えるという。つまり、英語もフランス語も、複数には大部分sをつける。英語では必ずず発音するが、フランス語では発音しない。次に母音ではじまる語がくると、潜在しているsが生きて発音される。これを「リエゾン」という。以下これに準ず、でいいんだよ……といわれて驚いた。乱暴なやり方だが、幸いに、東京外語学校の教授の「英語より仏語へ」という便利な教科書が出ているから、それを使えという。そして、途中から、時

時フランス映画の会話のテキストなどをプリントにして、しゃにむに読ませてしまえ、という。モーパーサンなどの小説をいきなり読ませてもいいという。後期へ行けば、豊島^{とよしま}さんが、バルザックなどを読ませるので、一年間でそこまで持っていくのは、まっとうなやり方では不可能である。

文学部の教室としては、二号館の二十八番、二十九番という二つが大きかった。席は二百人か三百人か、とにかくかなり多いのだが、学年はじめに教室へ行ってみると、すわりきれずに、後の壁にびっしりと立っている。これに圧倒されるなどいってもむりだ。わたくしは二十九番を使ったが、弥次馬がいるにしても、人数の多さには一応驚いた。文学部だけではなく、ほかの学部からかなり来ているらしい。

もう一つ、鈴木さんの秘伝には先があった。はじめは弥次馬が多すぎてどうにもならないから、人減らしのために、思いきって荒っぽくやれというのである。何しろ、初歩から教えるのはこっちの好意なのだし、独習できるような教科書があるのだから、しばらくそれをやって、すぐにテキストにかかれ、文法の説明の時に、一々読まずに、これは教科書の何ページにあるから自分で読め、という調子でやれば、学生がついて行けなくなつて、一学期中にちょうどいい人数になる、という。

法、文、経の教室の教壇の椅子は、古風で仰々しい。茶色の革張りで、ゴシック風というか、ばかに高いよりかかりがあり、そこにも革が張つてある。アカデミーの権威の象徴のような椅子にどっかりと腰かけて、何百人かの学生を見おろすわけだが、そのころは、マイクロフォンやラウドスピーカーの設備がなかった。わたくしは、地声が大きい方だが、「そのうしろの人、聞こえますか？ 聞こえるでしょうね」とまず確かめて、マイクなしで怒鳴りつづけなければならぬ。聞